近代文庫
86

# 近世前期の文学

片岡良一

創藝社

# 近世前期の文學

著者略歴

一八九七年神奈川に生る。東京大学国文科卒業。現在法政大学教授。日本文学協会員。近代日本文学の研究家として知られる。著書に「井原西鶴」「近代日本の作家と作品」「近代日本文学の展望」などがある。住所神奈川縣茅ヶ崎市甘沼二六七

昭和廿八年七月二十五日印刷
昭和廿八年七月三十日発行

定価八〇円

著者　片岡良一

発行者　米山謙治
東京都千代田区神田錦町一ノ一六

印刷者　杜陵印刷株式会社
東京都文京区八千代町二五

発行所　創芸社
東京都千代田区神田錦町一ノ一六
明治書院ビル（25）三六八〇番
振替東京一九〇四八二番

86

近代文庫

# 近世前期の文學

## ―上方町人の文學―

片岡良一

創藝社

# 目次

一　上方町人文學の特質とその背景……七
上方の意味——近世前期文學の一般的特質——學問の勃興と歌壇の大勢
二　假名草子から浮世草子へ……三九
近世と小說——假名草子に現れた近世的特質——西鶴浮世草子の特質とその限界——その他の浮世草子作家
三　淨瑠璃と歌舞伎……八二
近世劇の題目——古淨瑠璃と初期歌舞伎の歷史——近松作品の特質——その他の戲曲作家

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

四　俳諧の諸流派……一三六
抒情詩としての俳諧の特殊性——宗鑑・貞門・談林その他——
芭蕉俳諧の特質——蕉門の人々と葛飾風
五　上方町人文學の轉向……一七〇
近松前期文學についての要約と轉向の必然性——八文字屋の氣質物と俳諧の變質——竹田出雲等の合作と劇壇の風潮——結語
六　元祿文化の矛盾と歪み……一八九
——その文學的反映を主として——
解　說　重友毅

# 近世前期の文學

——西鶴・近松・芭蕉——

# 一　上方町人文學の特質とその背景

上方の町人文學はその頂點期を元祿時代に持つておりますので、普通元祿文學とよばれています。ここでも話は當然その元祿文學が主になるわけですが、建前としてはその頂點期が劃出されるまでの文學の歷史や、頂點期を過ぎてやや下り坂に向つた頃の文學についても、一通り概觀する豫定になつております。要するに室町末期乃至戰國時代の頃から、信長や秀吉がそれぞれの力で天下を統一した安土桃山時代を經て、結局德川氏がその覇業を樹立することになつた江戸時代の前半期、大體桃園天皇の寬延寶曆頃まで約二百年間にわたつての文學の流れが、當面の對象となるわけです。大體その頃から江戸時代の終りまでを近世とよびますので、この話は正確にいえばその近世の前半、卽ち近世前期の文學の概觀ということになります。ですから話の中にも、上方の町人文學とか元祿文學とかいうかわりに、近世とか近世前期の文學とかいう言葉を多く用いることになると思いますので、その點あらかじめお含み置き下さるようお願い致します。そこでまずこの時代がどういう時代であつたかということから、話をだんだんに文學の方に向けて行きたいと思いますが、この時代は、いわゆる、下剋上の室町末期乃至戰國時代から信長秀吉等の崛起というところなどにも示されている通り、賴朝の覇府樹立以來の世の中の秩序が破れて家柄と

か身分とかいうものに拘りなく、實力あるものがその實力によつて頭を擡げて來た時代であり、それについてそれまで武士の下に抑えつけられていた農工商の人々が社會の表面に進出して來た時代――というちにも商人の擡頭が目ざましかつた時代であります。そうしてその中心地が上方であり、そこを中心に新しい文化や文學が榮えることになりましたので、上方の町人文學などとよばれるものも成立したのでありましたが、彼等町人が名實ともに天下を支配するという時代は終に來ず、かえつて豐臣氏に代つた德川氏が天下の權を握つて、賴朝時代直後と同じようなーーむしろより以上にきびしく整つた武士の支配が持ち續けられることになつたのでありました。それだけ世の中の組織が複雜になつて、それを反映する文學もまた複雜な性質を持つということになつたのであります。

元來商人というものは武士のように主君というものを持たない獨立した人間であります。武士は皆主君を持ち、主君から與えられる俸祿によつて生命を繫いでいるものであります。ですから自分の一身は主君に捧げ、主君のためには自分の命など問題にしないことになります。その意味で武士は自分というものを持たぬものです。それに對して商人は自分で働き自分の力で生活きて行かねばならない、獨り立ちの存在であります。ですから彼等には自分の力を尙ぶ自力主義と、自分を生活の主人として尊重する自主自尊の氣持が强いのです。氏系圖を誇るとか、家柄を自慢するとか、門閥を得意がるとかいうようなことがなく、裸一貫の人間一匹と、そういう人間の持つ力や才能が誇られる、つまり人間個々の持つている値打が尊ばれるのです。そうして個々の人

間が尊まれるのですから、彼等の個人的に持つている氣持とか人間的な感情――即ち人情などが尊ばれることにもなります。いわゆる人間的なものの尊重です。商人の擡頭した近世には當然そういうものが認められた、その意味で、近世とは人間的なものの尊ばれた時代であつたということになります。

しかし、そういう人間的なものの尊重は何も近世にはじまつたことではなく、中世以前の上代にもそういう氣持は頗る强かつたのです。詳しくお話するまでもなく、柿本人麿の歌や山上憶良の歌などを考えていただけば、その點自然明瞭になりましよう。人麿の激しい戀を歌つた作品にしても、憶良の强く子供を愛した歌にしても、何れも個人的人間的な感情への執着であります。そういうものが文學の題材として始終、追求されている――それだけそれが珍重されていたことになりましよう。それが、その次の中世に入つてそういう氣持がすつかり弱められたのです。

中世というのは、前にもちよつと觸れました通り、頼朝が幕府を開いてから後ずつと武士が天下の權を握つていた時代であります。當然その時代には武士的なものの考え方が勢力を持つていました。個人的な感情などより秩序とか社會的な約束とかいうものが尊まれる、人間の命など鴻毛よりも輕んじて義に勇む、それと呼應して心持の安定（やすらぎ）を得るための宗教が榮える、ひいて現世よりも抽象された「名」の世界とか來世とかいうものが關心される――そういう時代でありました。

その時代が人情を殺して名義に生きるのを一般としていた趣や、宗教が極めて身近のものであ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

つた貌は、よく文學に扱われている熊谷直實の場合などを考えていただいても、手輕に理解していただけましよう。彼はわが子の小次郎と同年配の可愛いい敦盛を殺すに忍びなかつた。それが人情であります。が、彼はその人情に生きることは出來なかつた。結局、人情を抑えて敦盛を斬つてしまいました。平山等に見とがめられて、武士として義と名目とに生きなければならなかつたのです。しかもそうして斬つてしまつたあとで、彼は頭を丸めて坊さんになつてしまいました。それは中世に宗教が榮えた理由を說明するにはやや容易に過ぎた、その意味ではあまりいい例でないかも知れませんが、それでもとにかく中世という時代の性質を一通り摑ませぬことはありますまい。中世とはそういう時代であつたのです。

前にも擧げた憶良は、最愛の子供が死んだときには、冥土の使いに賄賂を贈ろうと歌つています。幼い子供の冥土への旅を案じて、賄賂をやるから背負つてやつてくれといつているのです。そんなにまで取りみだしてしまうほど感情的になつているのです。中世武士ならそんな場合賄賂と聞いただけで目に角立てるでしよう。それだけ人情とか人間的な感情とかいうものが强く抑えつけられるのが中世人にとつては普通のことであつたのです。それが近世になつて、も一度そういうものが尊重されるようになつたのです。隨つてそれは上代に還つたともいえます。そうして現れて來た人間尊重ですから、これは單純に人間尊重というより、人間回復とか人間復興とかいう方が相應しい。で、近世は一口には人間復興の時代だということになるのです。

ところで、そうして人間を尊び、人情を重視するということは、また當然人間が住んでいるこ

の社會――現實にある社會を尊重したり、日常の生活を尊重したりすることを意味します。人間の人間としての生活――佛樣になつて後の生活などではない、現在の生活そのものを尊重するのです。そういう生き方を現實主義といいますが、近世は卽ちその現實主義の時代――人間自身の現在の生活が尊まれた時代であつたのであります。ですから眼前現實の世界を「穢土」と考えたり、澆季末世として輕視したりはしない。却つて人間の住む所を「花の都」と考えたり「目前の喜見城」と呼んだりしています。

「半天五色の雲引はへ、一歩小判の花降るは、日比撒置きし種ぞかし、世を先立ちし太夫ども、年月の御恩此度と、諸々の菩薩に姿を變へ、八葉の小布團に救取り玉ひ、玉琴に須賀垣を上せ、三筋に投節、黃金盃、銀の燗鍋、七寶の菓子盆、靑磁の名香、簪の枝、何れも身より光を發ち、彼岸に引舟の女郎までも爰に現れ、女太鼓の藤も御機嫌取り、石車の伊右衞門が輕薄、井筒屋の太郎兵衞勝手に控え、玉の箱階子揚れば、世界の傾國一目に、四方明の大二階、吉野が居姿、和泉が奴風俗、吾妻が閑雅面形、三夕が物越、小太夫が華奢氣質、夕霧が情貌、半太夫が美さ、和州がぱつとしたもよし、長門がもの謂はぬも位あり、大橋が自然と豐なる風情、其外太夫を揃えて、一座に見る事、前の世でならぬ事なり」

これは西鶴作『好色二代男』の主人公の臨終の模樣を寫したもの、所謂御來迎にかたどつた作意でありながら、佛も菩薩もあらばこそ、すべてが遊女其他の人間の形造るこの世の歡樂世界で、しかもその最後には「前の世であらぬ事」――つまりこの現實世界以外には望まれぬ景況だ

ということが、はつきりといいきられているのです。人生絶對の想念がそれほどはつきりしていたからこそ、またこの人生におけるすべての事實を、出來るだけ人間の智慧や力で解決して行こうとする、前にもいつた自力主義の態度が打樹てられることにもなるのです。それがそういう世界觀を生きるものの自ら脊負わねばならぬ責任になるのですから。

商人擡頭という面から觀た近世とは、そんな時代でありました。そんな風に人間が尊重され現實が重視された時代でしたから、文學も當然人間を重視し、現實ありのままの相を寫す傾向を強く持つことになりました。卽ち寫實主義ですが、それは、ありのままの人間の生活やこの人生が文學に寫されていいだけの價値もあれば面白味もあるのだとする、そういう考え方の上に成立つ文學の方法なのです。

近世前期はこの寫實主義への傾向が著しく強まつた時代で、文學の多くが眼前の事實を寫し紹介するというような性質を持つております。名所記とか評判記とかいつて、自分達が見ている名所古蹟やいろいろな人間の評判——噂や批評をした、その中にはまだ十分文學になりきらぬものもあるけれども、とにかく大體として文學的であつたものが成立したり、小說などでも、自分達が見たり聞いたりしている巷の出來事などを、そのまま傳えたものが多くなつたりしています。詳しくは後の機會にお話しますが、例えば何處そこの何という店がどういう主人の才覺によつて利益を多く得るようになり、大きな商店となつて行つたとか、反對にどういう理由で失敗したとか、何處にどういう廓があつてそこにはどんな種類の遊女が居り、其處での遊びの樣式や雰圍氣

はどんなものであるとか、放蕩者や不幸者にどんな種類や型があるとか、というようなことが、所謂小說的な脚色など殆ど加えられないで傳えられる。一人の人間――例えば夕霧なら夕霧という遊女が死ぬと、それがキッカケになつて彼女のことを書いた作品が幾つも現れる。人間が尊重されているから、その人間の死というような現象も重大視される、そこでこういう現象も生じて來るのです。芭蕉の臨終の模樣を書いた――それもただ日記風に書いた『花屋日記』などという優れた作品が、この時代に出ていることは多くの方が御承知でしよう。前に引用した御來迎まがいの情景などを作り出すというのから更に進んで、ただありのままの臨終其物の模樣が描かれて、それが重大な意味と感動とを以て受取られる――寫實主義が其處まで徹底して行つているのです。

こういう場合、それが單なる記錄であり、報告と紹介だけのものであれば、それがまだ文學になりきらぬものであることはいうまでもありません。其處に報告され記錄されている事柄の意味――芭蕉なら芭蕉が死んだという現象だけではないその現象のもつ意味が正しく捉えられて、それが讀者の感動にはたらきかけるように形象化された時、はじめて文學になるのであります。ですから寫實主義文學の髓というものは、そういう意味をどれほど深く、どれほど混り氣なく捉え描いているかという點に認められることになります。いろいろな現象を繫いで、その現象相互の間に辿られる意味の發展や連關を捉える――それが寫實主義文學の筋になります。そういう筋なり意味なりに觸れないものは、まだ寫實主義文學としての魂を吹込まれない、單なる記錄であり

お話であるに過ぎないもの、評判記などというものがまだ十分文學に成りきつたものとはいえない所以なのですが、とにかくそういうものをもこめて、近世前期は、こうして著しく寫實主義への傾きが濃くなつた時代であつたのです。際物といつて、事件があつて數日のうちにその事件がそのまま操り芝居の脚本にとり込まれたものもあれば、市井の出來事をそのまま作品化した世話物なども成立しました。世話物と違つて昔の人間を舞臺に登場させる時代物の場合にも、それらの人々が決して古い昔の人として昔の世界に登場するのではなく、矢張り近世の人として近世の世界に登場することになります。義經でも辨慶でも曾我兄弟でも、皆近世の人にされてしまつているのです。そう大昔ではない室町末期の亂世に取材したものですが、近松の『雪女五枚羽子板』という作に、足利將軍義敎が赤沼入道の館で追儺の「御祝儀」を行うことが書かれています。「御供の諸大名殘らず退出させ、古風なことをさらりと止め」て、その代りに「姉が小路の針屋の縫、紺屋のお染、白粉屋の艶、絲屋の房、舞子踊子」集め、琴三味線小唄の酒宴を開き、將軍義敎が其中で「年豆」をぼりぼり食べる——そんなことになつています。同じ作の斯波細川等の忠臣が逆臣赤沼征伐の軍を動かす所は、「藤内四郎は犬二郎が背中に太鼓をくくりつけ、御出陣の武者揃へ、味方を集むる觸れ太鼓の、祕曲を打つて祝はんと、撥かろ〳〵と打ち鳴らし、聲張上げてふれにける。明日より吉野の山にて大合戰、寄手の勢は三萬つづき、敵役は赤沼入道、御望みの方々、明日は疾うからから〳〵、とん〳〵から〳〵どんがらが、つッてん」という工合の、操り芝居の口上めいたものになつてしまつています。矢張り近松の作である『傾城島原

蛙合戰』の如きは、賴朝の奥州征伐を發端として其處から事件を引出したものでありながら、何時の間にか例の天草の亂を世界とするものになつてしまい、しかも主人公の七草四郎が京島原の太夫を身請けする。その太夫が天草攻めに活躍するなどという完全に近世町人的なものになつてしまつています。奈良朝を描いても平安朝の儀式を取り扱つても皆その類なのです。と同時に、忠臣藏のような事件があると、それは幕府に對して書くことを遠慮せねばならぬ材料であるのに、一寸昔のことのように裝つて、實際はあつたままの事件を書いて行く、というようなこともありました。自分達の住んでいる世の中に起つた出來事が、面白くてありがたくて書かずにはいられないのです。それらがすべて寫實主義文學としての徹到性や純粹さをもつていたというのではありませんけれども、そうした現象のどこにも、寫實主義的、現實主義的な傾向が強く含まれていることにはなりましよう。そういう時代ですから、芭蕉などでも「まこと」――眞實とかありのままとかいうものを非常に尊んでおりました。「まことのほかに俳諧なし」――同じ時代の上島鬼貫などは、はつきりとそういうことをいつております。

そこで次には、そういう「まこと」の尊重は一方には眞理の尊重と連る筈のものですから、そこに今日一種の流行言葉のようになつている知性の尊重などをも現象します。またそうでなくても、商人というものは細かい金の勘定や利益の計算をしたり、廣い世間を對手にして複雜な心のはたらきや才能を見せねばならなかつたりするものです。新しいものを作り出すことを考えたり、古いものに改良の工夫を加えたり、すべてが「知」の尊重と連るわけで、その點、御主君大

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com